

# 『伏屋の物語』から『秋月物語』へ

——『住吉物語』との関わりを中心として——

真 下 美 弥 子

## 序

『秋月物語』（以下『秋月』とする）は、室町時代物語『伏屋』をもとに作られたといわれる物語草子である。この二つの物語の最も大きな違いは、失踪した姫君の滞在先であり、作品名ともなっている地を『伏屋』が信濃の伏屋とするのに対し、『秋月』では筑紫の秋月とすることであろう。『伏屋』の骨子は、『秋月』に確實に受け継がれている。しかしその二面で『秋月』が、『伏屋』とはかなり質の異なる完成を遂げていることも事実であろう。

『伏屋』に対する『秋月』の特徴を、ひと口でいうならば、ひどく複雑で長大になっていることに尽きるであろう。試みに紙数を比べてみるならば、写本系統の場合、二倍ないし三倍となる。その要因としては、従来道行の部分に多くの故事説話を取り込んで行ったことが指摘されて来た。しかし、あらゆるものを貪欲に取り込んで行く生命力は、故事説話の蒐集だけにとどまらない。冒頭からくり広げられる継子物風恋愛譚の部分もまた、『住吉物語』

（以下『住吉』とする）を絡めることによって、独特なストーリーを展開させて行くのである。

そこで、小稿では、『伏屋』から『秋月』への改作の過程において、『住吉』が取り入れられることによって、どのような作品として作り上げられて行ったのかについて明らかにしていきたい。

## 一

『秋月』のもととなったといわれる『伏屋』は、『風葉和歌集』にその名を見ることが出来る物語（『古伏屋』とする）が室町期に改作されて出来たものといわれる。これは、現存する諸本間の異同が大きいこと、また古浄瑠璃にも改作されていることなどから、人気の高かったことが知られる作品である。

『伏屋』と『秋月』の改作の関係に言及したもので、管見に及ぶ限り最も早いものは、島津久基氏『近古小説新纂』<sup>①</sup>に紹介された大野木克豊氏の見解であろう。前田家本『ふせやのものかたり』に添えられていたという氏の「ふせや物語考追記」を享けた島津



氏は、「古『ふせや』から新『ふせや』が生れ、次いで間もなく『秋月』が成つたのであらう」という成立の順序を提示された。

また、『秋月』と『住吉』の關係を最初に指摘されたのは松本隆信氏<sup>⑧</sup>であつた。氏は(1)人物設定およびその關係、(2)恋愛の過程、(3)継母の奸計、(4)男主人公の搜索の間の同伴者の有無、(5)父との

対面の方法、の五点について、『伏屋』と『住吉』とのいずれに近いかを比較された上で、『秋月』が『伏屋』と『住吉』の「両」を折衷して作られた觀を呈している」との見通しを立てられている。このような氏の見解は、大筋において肯うべきものである。しかし、『伏屋』から『秋月』への改作は、『古伏屋』以来幾重にもなされて来た、『住吉』との複雑な交渉を背景としている。

その過程を解きほぐして行く端緒とするためにも、ここではその方法を詳細に検討して行く必要があるのではないだろうか。そこで次に、『住吉』『伏屋』『秋月』の三者について、その筋立を表

示し、手懸りとして行きたい。

本表の作製に際して、『住吉』については、室町時代物語と同時期に広く読まれた一本として古活字本を使用する。『伏屋』は、現存本中書写年代が比較的古く、かつ本文の完備している慶応義塾図書館本を、<sup>⑨</sup>『秋月』については、現存本中書写年代の最も古いとされる高山欲喜寺藏本を使用することとする。以下に行なう本文の引用も、これに従う。

『住吉』物語	『伏屋』の物語	『秋月』物語
<p>(一) 姫君の誕生と継母の出来</p> <p>昔、中納言で左衛門督をかけた人あり。妻二人を持つ。一人は諸大夫の娘で姫君二人あり、今一人は古い宮腹の娘であつた。宮腹との間には光るほどの姫君が生れるが、姫君が七歳の時に母は亡くなる。</p> <p>この姫君は十歳を過ぎた頃、父邸に迎えられ、異母妹である中の君三の君と仲良く暮す。乳母は中納言に故母上の希望であつた入内の件を催促するが、継母への遠慮があつて進まない。</p>	<p>昔、播磨少将源ただふさという人あり。北の方は二条中納言の娘で、その間に姫君が生れる。姫君が七歳の時、母は亡くなる。</p> <p>三年過ぎて、姫君が母を欲しがると、父は五条宰相未亡人と再婚する。継母には十二になる連れ子がいた。父の姫には「にほひ」、連れ子は「あひし」である。にはひは母の供養に明け暮れる。</p>	<p>いつの世であつたか、都に大納言(通称「京極大納言」)あり。北の方は源中納言の妹で、その間に姫君が生れる(「愛敬の君」)。姫君が七歳の時に母は亡くなる。</p> <p>三年後、大納言は三条宰相未亡人を北の方として迎える。愛子の君という、姫君と同年代の連れ子がいた。愛敬の君は故母上の供養を専らとする。愛敬と愛子は仲が良い。大納言は故北の方の希望であつた愛敬の入内を進める心</p>



(二) 男 君 の 求 愛 (1)

<p>右大臣の子四位の少将は、この姫君の噂を聞いて恋におちる。何度か文を送るが、返事は得られない。これを聞いた継母は、少将を実子の三の君の躰にと望み、使いを語らい、手引きさせる。少将は三の君のもとへ通うこととなり、何も疑わない。しかし、向いの西の対に興味を持つようになり、秋の夜の琴の音が発端となり、たばかられたことを知る。</p>	<p>二人の姫君は清水へ参る。三位中将の子の少将は、にほひ姫に興味を持ち、女装して清水へ行き、たちまち恋におちる。少将は文を送るが、使いの童は継母につかまり、接待を受けた末に、にほひ姫が病氣持ちだと聞かされる。報告を聞いた少将は、志を変えずに文を送り、姫の返事を得て、その後は忍んで通う。</p>	<p>その頃帝の代替りがあり、愛敬は入内の準備を進めるところに病を得て、太秦へ参籠する。折節居合せた関白の息子の二位中将は、姫が車に乗る所を目撃し、恋におちる。中将は、京極殿に縁のある下仕えのしらかはを召して、文を託す。しらかはは愛敬の月見の御所へ参つて、乳母の大二の局と対面するが、文の取り継ぎは断られる。これを聞きつけた北の方は、愛子の乳母のかはらの局とたくらみ、しらかはをもてなして、中将にとりなすように取り付ける。中将はほどなく愛子と逢うが、太秦の人でないことに気付く。秋、中将は愛子のもとで琴の音を聞き、それが愛敬のものであることを知る。</p>
<p>冬、少将は雪の日に姫君の方に付き、侍女に文を託す。正月、少将は嵯峨野見物の姫君の一行を覗き、歌を詠みかける。侍従が亡き乳母の方より戻った折しも、少将は訪ねて歌を詠む。</p>		<p>愛子の方の女房であるもしほの前とおはりの君は、愛子に北の方の奸計とその経緯を告げる。愛子は中将を問いただし、愛敬との仲をとりもつことを約する。愛子は月見の方へ行き、愛敬に中将のことを勧める。しかし愛敬は再三</p>



(二) 男 君 の 求 愛 (2)

九月、中納言は北の方に姫君を五節に参らせ、計画を伝える。継母はこれを妨害しようとするが、姫君の方に六角堂の別当法師が通うと讒言する。継母はむくつけ女に命じ、法師の出で行くところを見せる。中納言は入内を中止し、代わり内大臣の息子の宰相との話をすすめる。

このことをそねんだ継母は、むくつけ女を語らい、むくつけの兄の翁に姫を盗ませる計画をたてる。これを聞いた心寄せの式部は、侍従に知らせる。侍従は故

継母はこのことを安からず思い、武士に引出物を取らせて、姫君を失うことを命ずる。父少将は不吉な夢を見るが、継母はそれを逆のこととして合わせる。そ

それを知った継母は、二人の武士を語らい、愛敬を流し捨てて命ずる。一方近衛中将は、用意方端整えて愛敬の嫁入りを待つ。八月半ば、大納言の留守中に、武士共は愛敬をさら

五月五日の内裏の節会の夜、大納言と北の方の留守の間に、愛子は愛敬の方の女房と心を合わせ、中将を招き入れる。中将は女装して愛敬と琴を合奏、女房達が灯を消した隙に愛敬と会う。これを伝え聞いた継母は腹を立てるが、愛子はたしなめる。中将は愛子の心中を際して訪問するが、愛子は恨みがましいそぶりは見せない。継母はこれを大納言に讒言、大納言は愛敬を近衛中将に会わすこととする。中将はこれを聞いて、事前に姫を迎え取することを計画する。

の勧めにも応じず、文も見ない。愛子は愛敬の乳母達を説得、その結果、乳母の大二の局が一筆返事することを勧める。大納言は愛敬のもとへ行き、入内の中止を告げる。それは北の方とかはらの局が流した、愛敬のもとへ法師が通うという噂を信じたことによるものだった。



(五) 男 君 の 捜 索	(四) 姫君の失踪と尼君の庇護
<p>少将は姫君の行方を尋ねて神仏へ祈願する。鞍馬に詣でて歌を詠む。初瀬に籠って姫君を夢に見、住吉を尋ねよとの啓示を受ける。隨身一人を具して立田山を越え住吉へ向う。</p>	<p>母宮の乳母である住吉の尼の許へ避難する準備をする。姫君は九月二十日の夜、家を出て淀へ着く。</p> <p>姫君の一行は乗船し、住吉に到着する。尼君の方で暮らし、都に思いをはせる。父に長歌を送る。</p>
<p>少将は住吉に参籠して翁の示現を受け、東国を尋ねよと指示される。都へ帰り、ある山伏のもとで装束を整えて東へ下る。少将が大津の浜で船を待っている。翁が来り少将を乗せる。翁は少将の供をすることを約する。</p> <p>道中、翁は少将を不思議な邸へ招き入れる。美濃、尾張、駿河を通過する。少将は姫君を夢に見て、居場所を知る。</p>	<p>近江の湖のほとりで、武士は姫君の命を奪おうとし、姫は念仏を唱える。しかし武士の太刀は三つに折れ、弓矢も折れる。武士は姫君を湖へ入れて帰る。そこへ故母上が亀となって現れ、姫君を救って瀬田の橋の上に置いて消える。</p> <p>姫君が行末を案ずるところへ、熊野詣での下向の尼君の一行が通る。姫君は尼君に伴われて信濃の伏屋へ下り、尼君にかしづかれて暮す。</p>
<p>中将は清水に参籠して筑紫を尋ねよとの夢告を受ける。中将はひとり山伏の装束をして、兵庫へ行く。使船を尋ねる折節、二十四五の蓑を着た賤しげな男（冠者）の計らいを受ける。</p> <p>中将を乗せた船は備後を通過、赤間が関の宿では遊女かうますのもてなしを受ける。芦屋の里から上陸して、冠者に導かれて行く。箱崎の宿で中将は姫君を夢に見る。箱崎の八幡で、冠者は八幡大菩薩について説く。また、箱崎の松原では中将を観音の浄土へいざなう。太宰へ着</p>	<p>姫君はその日のうちに讃岐の国、蛭が小島に着く。武士どもは姫君に念仏をすめるが、剣は三つに折れ、弓も折れる。武士は姫君を海へ入れて逃げるが、淡路が瀬戸で大風に吹かれ、命を落とす。姫君は亡き母の化身である大亀に助けられる。</p> <p>島にとり残された姫君は、沙羯羅竜王の第五王子の示現を受ける。そこへ熊野より下向の尼君の船が流され着く。尼君は姫君を伴って秋月の御所へ帰り、姫君をかしづく。</p>



<p>(内) 再 会 と 京 上 り</p>	
<p>住吉の姫君も、少将が自分を尋ねている夢を見る。</p>	<p>住吉に着いた少将は、松葉を拾う童に尋ねて尼君の方へ行く。 少将を迎えた人々は、屏風を立て、居所をしつらう。二三日過ぎて、刃に住む身内の者が集い、松の下で酒を飲み、騒ぐ。夜更と共に管弦も催される。</p>
<p>京へ上る当日、姫君も住吉になつかしさを感じつつ、船に乗る。</p>	<p>伏屋の姫君は、夢で故母より二三日中に慶事のあることを知らされる。 少将は伏屋に到着。翁は住吉の明神であることを告げ、姫君の住居を教えて消える。 少将は邸をさぐり、笛を取り出して姫君に知らせる。姫君は琴で応ずる。 その様子を聞いた尼君は、少将を内へ入れ手厚くもてなす。少将は四五日後に信濃の国司を呼ぶ。国司は上洛の準備をする。</p>
<p>姫君の父中納言は、何も知らずに心配を続ける。姫君は父に知らせたいが、少将は継母を恐れてとどめる。</p>	<p>京へ着き、参内する。帝は継母に対して、一日に一本ずつ手足の指を切った上で湖へ沈めよとの宣旨を下すが、姫君のいた二人は安楽寺へ参る。天神の前生が述べられる。 姫君の方では故母上が夢枕に立ち、中将が捜していること、自ら亀に現じて助けたこと、清水観音の加護について告げる。 冠者は秋月の館まで中将を導き、清水での再会を告げて白鷺となって飛び去る。 邸内に入った中将は、笛を吹いて姫君に知らせる。一方姫君も琴で応ずる。 この様子を聞いた尼君は、中将に装束を奉り、姫君に対面させる。二人は尼君や土地の武士にもてなされ、正月を過す。その後中将は京上りのために、太宰の大式を召す。中将に対面した大式は、驚きのあまり縁より転び落ち、烏帽子を地につけてかしまる。大式をはじめ、武士達による碗飯が繰り返され、御所の的も催される。尼君は中将の為に新御所を造立する。鷹狩も行なわれる。 三月十八日、四百五十丁の興と七千余騎の大軍で、秋月を出発。安楽寺、箱崎、赤間が関に立寄って兵庫へ着く。 関白夫妻や京極殿をはじめとする都の人々の喜びはこの上ない。京極殿からこれを聞いた継母は、うらたえる。愛子は母を恥じて家を</p>



(七) 一族の繁栄と継母の行方

やがて若君姫君が生れる。若君七歳姫君五歳の年、袴着が行なわれ、父大納言が招かれる。その引出物の小袿が姫君のものであることに気づき、父娘の再会がなされる。大納言は継母と別居する。

やがて若君姫君はそれぞれ三位中將と女御となり、侍従は内侍となる。大將姫君は繁昌する。継母は人々にうとまれ、衰えて亡くなる。むくつけ女は気が狂って、まどい歩いたとか。

願いによって許される(尊経閣本はここを、継母と愛子の二人は平に入れられるが、後に愛子は許されるとする)。姫君の父の喜びは限りない。

少將は関白となる。尼君は信濃越後兩國の司となる。少將は任吉にお礼参りする。その後三人の若君と一人の姫君が生れ、それぞれ繁栄する。その後、父、姫君、関白、若君たちは神と現じた。

出、清閑寺へ入る。愛子を失った継母は悲観して、河原局の案内で、清水辺の寺へ入る。京へ着いた中將の一行は、姫君もともに関白殿へ入る。やがて父京極殿とも再会する。

姫君と中將は清水へ参る。姫君は愛子の行方を尋ねて、侍女を清水へ籠らせる。そこで愛子方の侍女に行逢う。愛子は迎えを拒むが、京極殿よりの迎えもあり、その後はめでたく栄える。

北の政所となった姫君は、若君三人姫君二人に恵まれ、姫君は后に立つ。秋月の尼君も栄える。継母は愛子の志によって尋ね出され、清水辺に御所を建てて暮す。誰もがめでたく繁昌して、毎月十八日に清水へ参り、信仰した。

二

前節に示した表中、主として問題となる(一)の部分について、各節ごとに見て行くこととする。

まず、主人公である姫君の、誕生から成長に至る部分から入りたい(表(一)参照)。「秋月」は、次のように書き出される。

いづれのときにか侍りけむ、みやこに、大なごんと申て公卿

一人、をはします、御かたち、人にすくれて、よろつめてたく、わたらせ給ふ

きたの御かたちは、みなもとの中なこんの御いもうとにて、これも、すくれて、きこえ給ふ、かた／＼、めてたくをはします

す  
そのなかに、ひめきみ一人いてき給ふ、御かたち、めてたく、御ゆくゑもいか／＼と、人申あひける



七さいと申に、はうへ、れるならず、なやみ給ひて、ほとなく、露ときえ給ひける、大なこんとの、御なげき、もろとも、露のいのちもならばやと、おほしけれとも、きえぬは、人のいのちなり、さても、御とふらひ、ねんころに、しままひける

さて、つもらぬ月日の、ならるにて、なげきながらも、第三年すきければ、いかで、ひとりのみ、をしますへきとて、御一もんの御計に、三てうのさいしやうにすきをくれて、をします人を、むかへまいらせて、きたの御かたと、かしつき給ふ、これも、よにまたなき人にて、をします、おなしほとひめきみ、一人をはしけり

室町期に行なわれた継子物風恋愛譚のいづれとも似通う冒頭である。その中でこの『秋月』は、姫君が父とその正妻である母との間に生れている点、継母が後に興入れして来る点、連れ子が一人である点の三点から、直接的には『伏屋』に依拠していると考えられる。

しかし、『伏屋』からそのような基本的な構想を受け継ぎながらも、ここでの姫君をめぐる叙述には、『住吉』の影響を強く受けたと思われる箇所が散見している。その一つは、継母の出来の直後に置かれた、次のような姫君の美貌の形容である。

めてたくおひたせ給ふ、御すかた、秋の野々、おみなべしの、露おもげなるさま、うちしほれたる、よそほひにて、をします。

一読して直ちに連想されるのは、姫君の姿を同じように女郎花に譬えている『住吉』の、文の使いから帰ったちくせんの報告中の、はみやの御事ともおりくなげき給ひし御姿、いへはをろかにこそ

をみなへしの露おもげにて、まかきのほかに、たをれいてたるこちして、其事となくあはれに、いとおしく、よそのたもとまでも、露けく候ひつると、申ければ

という一節であろう。母への追慕の情とともに使われている、『住吉』のこのような形容は、桑原博史氏によって、河内本系『源氏物語』に初出し、数編の擬古物語に使用されていることと、室町期の物語には類例を見出しえないことが指摘されている<sup>⑤</sup>。室町から近世初期にかけての書写になる現存各本が殆ど例外なくこの女郎花の譬喩を有することからも、これが擬古物語『住吉』のものとして当時の人々にとって印象深いものであったことが推察されるものである。ちなみに、現存する『伏屋』諸本にはこの女郎花の譬喩は見当らない。これに対応する箇所には、

この、にはひのひめきみの、御かたち、三十二さうの身ならず、御心さま、いふはかりなし、御しゆせき、いつくしく、わかのみち、こと、ひわ、なんともすくられて、ほうもん、しやうけうも、くらからず

等の、いかにも室町物語風の一節が置かれている。『秋月』は、先に引用した冒頭の、「めでたし」の頻用にも端的に表われているように、『伏屋』をもととした部分においては、叙述が概略的



な方向へ流れて行く傾向が見られる。その中で、この姫君の形容にだけは、『住吉』の一部分が、場面をとり越えて選り出され、ほぼそのままの形で取り入れられている。これは、『秋月』作者がこの作品に『住吉』の姫君のイメージを重ね合わせるということを用意してのことではなかったらうか。

ここでもう一つ注目したいのは、『伏屋』には見られなかった入内に関する記事が、この箇所にはかなり大きく取り入れられていることである。このことは姫君の成長の後、何の前触れもなく、

さて、こはゝの、いまわのときも、うちまいりの事のみ給ひしことなれば、大なこん殿は、御心ひとつに、おほしめして、いとなみ給へとも、なきぬ御なかなれば、おなし御心のやうにも、おはせぬ事のみ、なげき給ふ

のように、叙述されている。例えば『住吉』の場合、現存本の多くは入内について、幼い姫君の行末を案じた母が臨終の際に夫の大納言にそれを託す。そして姫君の成長後実現可能となった時点で、今度は乳母によって催促がなされるのである。ところが『秋月』では遺言としては触れられなかった入内の希望が、当然なされたこととしてここに叙述される。それはおそらく『住吉』を知る読者たちによって、「なみく／＼ならんありさま、せさせ給ふな」云々が想起されることを前提としてのことではなかったらうか。

このような入内の記事が、この『秋月』で以後展開されて行く、

『伏屋の物語』から『秋月物語』へ

『住吉』風の恋愛譚中の恋の障害の伏線として、必要なものであったことは言うまでもあるまい。この一文の直後にはさらに、次のような記事が続けられて行く。

a. 大なこんの御いもうとは、たうだいのにようにておはします、このひめきみを御子にして、ねうごに、まいらせんと、  
さため給ひける

b. さるほとに、この姫君をきく給ふ人く、心をかけ、なやますといふことなし、されは、みやたちも御心をかけ、たまつさを、かよはし給へとも、おさなくおはしますま、なにとなく、すきゆき給ひぬ

aでの、叔母が宮中におり、その縁で宮仕えするという記事は、入内の実現に強力な後盾のあることを意味するにとどまるものではない。それは格別の帝寵を受ける可能性をも示唆するものではなかったか。またbは、室町時代物語の慣用句であって、姫君が既に華やかな存在であったことを示すものである。このように、『伏屋』から『秋月』が作られて行く際には、『住吉』が背後にあるものとして取り込まれて行くのみならず、それ以外の物語の諸要素までも取り込まれて行く。そのようにして、『秋月』独自の世界は作られて行くのである。

### 三

これに続く、男女主人公の出会いと恋愛の部分(表(白)参照)に移ろう。出会いの場の清水から大秦への変更(白)もむしろ、その出



会いの動機、方法などの微妙な差異に気をつけたい。これに先行する『伏屋』の場合は、『住吉』の嵯峨野の子の日の遊びの影響を受けているといわれるように、その主眼は姉妹の「美人比べ」に置かれる。男主人公も、それを予め知った上で出掛ける。これに対して『秋月』は、

さるほとに、そのころ御門は、白川の院におりるさせ給ひて、式部卿のみや、くらゐにたち給ふほとに、にようごまいりも、いそかはしく、おほしめすところに、ひめきみ御心なやましくて、うつまさへ、まいり給ひける

と状況説明されるように、姫君は入内を目前に控えて病を得ての、単独の参詣であり、男主人公もそこに偶然参り合わせたものとされる。

このような変更に至った要因の一つとしては、後に姉妹とり違えの趣向が用意されていることとの関わりがまず考えられるであろう。それと同時に、ここでの設定の持つ意味にも注意したい。病を得ての参詣、しかもそれが入内の直前であるというところには、神仏の強いひき合わせが背後に感じられるのではないかとするならば、『秋月』でのこのような変更は、妃への道を捨てても結ばれるべき素晴らしい恋へと発展して行く、より運命的な出会いとして、あらたな意味を持たせることとなつたのであろう。

これに続く男君の求愛は、一転して『住吉』を髣髴させる運びとなつて行く。その部分は『住吉』の「ちくせん」を連想させる下仕えの登場を端緒とする。当該部分を少しく引用しよう。

〔『住吉』〕(a)う大臣の、はしたまもの、そらさゑと云物の、男にてありける、しもつかへになりて、ちくせん(開ゆるなん)ときこえなん(略)、朝夕に、この姫君を見聞けり(略)(b)少将、立聞給ひて、いとうれしき事を、きつる物かなとおほして、わかさうしに、ちくせんをよひて、(c)みるらんやうに、さもとある人、あまたあれ共、ものうくのみして過す、中納言の、みやはらのひめ君は、みしかと尋給ひければ、(d)ちくせん、おとこにて、侍りし物、こはゝみやに、侍しかは、よく見奉りて侍し、(e)世にうつくしく、(f)中なこんとは官仕をと、のたまへは、うちかなはて、おほしなげくとぞ承と、いへは、(g)其人の事、いひよりて、文なと、つたへんやと、の給へは、かなはん事はしらす、御文をもちて、参りてこそは見侍らめと、きこゆれば、

〔『秋月』〕(a)大みやに、しもつかひのありけるか、京極殿に、ゑんあるものにてありけるを、(b)中将、いかゝしてきゝ給ひける、此ものをめして、とひ給ひけるは、(c)京極殿の御かたを、しれるかと、のたまへは、(d)よくはしりまいらせ候はねとも、北の御かたに候いし人のかたへ、つねに、まいり候と申ければ、(e)さては、ひめきみ、おはしますかと、とひ給へは、うつくしく、わたらせ給ふよしをうけたまはり候と申ければ、文もちて、まいるへきかと仰ければ、(f)いさや、それはにょうこに、まいり給ふへきと、うけ給候、(g)さもあれ、ゆきてみると、の給へは、さらは、文たまはらんと申、うれしくお



ほしめして、文に、

各傍線部 a ~ g に沿って、『住吉』『秋月』のそれぞれを、比較して行こう。(a)では身内の下仕えで姫君方に縁ある者を登場させ、(b)では男君がこの者を招し、(c)では姫君の方への連絡の可能性を問う。そして(d)~(f)ではその者が、故母の方へ通じていること、姫君の美しいこと、女御参りの予定のあることを告げ、(g)ではともかくも文のうけ渡しをすることを約する。つまり『秋月』は、固有名詞こそ変更しているものの、『住吉』に完全に倣っているのである。言葉を換えるなら、『住吉』の場面をここにそのまま割り入れたといっても差しつかえないだろう。しかもここでは引用文の直後、継母の奸計によって愛子に逢わされた中将が、即座にそれが別人であることに気づき、下仕えを叱責する条に、

昔、住吉の姫君のやうに、とりちがえてこそあるらめ

と叙述されている。このようなことから、『住吉』をことさらに想起させる意図のあったことが想像されるのである。

ここに『住吉』の場面を誘引するに至った背後には、古本以来『伏屋』が重ねて来た『住吉』との交渉を考えなくてはならないだろう。既に室町の『伏屋』にも、これに似た文の使いの場面は登場している。そして、その場面は『秋月』の作製にあたり、このような方法によって再び『住吉』を呼び寄せて行くのである。

『住吉』の割り入れは続けられ、次のような場面に入って行く。かくて、秋もなかばになりぬれば、夜さむの風も、すさまじく、枕のしたのきりくす、折から、あはれをもよほして、

『伏屋の物語』から『秋月物語』へ

枕は、あまの、つりするはかりなるに、いつくともなく、きんのね、つまおと、けたかくきこえければ、まくらをそばたて、きく給へは、月見のかたなり

いよ／＼心あくかれて、おほせけるは、愛子きく給ふかとの給へは、あれこそ、大なこんの姫君、愛敬とて、おほしけるかへ略)いつもひき給ふ、わらはもはしめより、あはれにきくなしさふらひぬと、なに心なく、かたり給へは、中将はきく給ひて、わが心のうちを、しらせたまはて、うちとけ、かたり給ふことの、あはれきよとて、いとおしく、おほしけれとも、

秋の夜中、聞えて来る琴の音を男君が尋ねる。それに対して何も知らない女君がありのままを告げる。これが『住吉』を模したものであることは、疑うべくもないであろう。しかし、その場面の持つ意味あいは、『住吉』とは明らかに違って来るのである。

『住吉』では、噂を聞いて姫君に求愛するため、三の君に会わされても、男君は一旦は満足してしまふ。そして、ここで琴の音の主の名を知り、初めて謀られたことに気づく。ところが、『秋月』の場合は、既に愛敬の存在を知る男君に対して、愛敬がそれを告げたにすぎない。ここでの男君の胸中に去来するものは、愛子の何心ない態度に対する憐みだけとなり、『住吉』ほどの重みを持つには至らないのである。

筋の運びの論理性を越えて、ここにこの場面が繋げられたのは、



秋の夜、琴の音という道具立てと、「夜さむの風」「枕の下のきりくす」等の印象的な語句によって醸し出される場面の魅力によるものではなかったか。それは、この『秋月』よりもやや時期を早くして成ったと考えられる『木幡の時雨』にも、同じような趣向が用いられていることから、十分推察されることである。

『伏屋』の変奏である、寺での出会いに始められた男君の求愛は、文の使いの場面を契機として、突然『住吉』に切り替えられ、殆どそのままの数場面が繋げられて行く。このように、別個の物語の連続した数場面を継ぎ合わせて行くことによって、新たな物語を作り出すという方法は、室町の物語において初めてなされたことではなかったろうか。それらは物語に妙味を添えつつ、これ以降の更なる展開の橋渡しともなっていることである。

## 四

『秋月』の男君の求愛は、『住吉』風の場面を受けた後、意外な方向に展開して行く。継母の連れ子である愛子が、母の行動をたしなめ、一旦は自らの夫となった中将と愛敬との仲をとりもつべく、大活躍をするのである(表(三)参照)。

このような愛子の活躍を、松本隆信氏は、『住吉』の三の君の好意を発展させたものとされる。それは、民間話の継子譚に見られる実子の援助の影響を指摘された上でのことであった。たしかに三の君は、継子の子という立場、異母姉妹に好意を寄せているという点などから、愛子の一つの祖型となっていることは間違

いないだろう。しかし、その行動に限って見て行くならば、そこにはやや疑問が感じられるのである。ここでの愛子は、(a)中将に真意を問いただし、愛敬との仲をとりもつことを約する、(b)文を携え愛敬の月見の亭へ渡り、説得する、(c)耳を貸さない愛敬への対策として、月見の乳母達を説得して味方につける、(d)父母の留守中に中将を招き入れ、女装させて愛敬との琴の合奏を行ない、その後灯を消して会わせる、等といった、鮮やかな立ち回りを演ずる。その様子については、例えば矢野本<sup>⑤</sup>では(c)の部分で、

さるほとに、あるしおほしける、月見のめのとたちを、すかき(さ力)はやとおほして、みなく、よひたまひて、中にも大二のきみ、三ゐ、やうくもてなして、のたもふ

等と描く。このような愛子のしたたかさは、姫君の域をはるかに越えたものではないか。そこには単なる好意の延長からだけでは、捉え切れない部分が残されるのである。

この部分でも前にひき続き、女君に思いを寄せ続ける男君、それを拒む女君、入内を進める心づもりの父、その待遇をそねみ妨害しようとする継母という関係は、保たれている。そこからは、ここもまた『住吉』を基調としていくことが知られる。そこで試みに、ここでの人物とその行動について、『住吉』との関係を整理し、物語の創作の過程から、愛子の行動の拠る所を探ってみることとしたい。

女主人の愛敬を『住吉』の姫君と見たてることが、問題ないだろう。愛子については、松本氏の御論に従って、三の君に擬えて



考えて行きたい。愛子の方から見て行こう。乳母「かはらの局」は、北の方と組んで奸計をめぐらす点、「むくつけ女」に問題なく対応しよう。また愛子と中将との仲を心配し、北の方の奸計を愛子に知らせる二人の女房「もしほ」「おはり」は、「心寄せの式部」にはぼそのまま相当すると見て、支障あるまい。それに対して、姫君の側は、「住吉」とはやや条件が異なってくる。この姫君は父の邸で生れて大切に養育され、「大二」「三位」の二人の乳母が付いている。常識から考えるならば、しっかりした乳母さえ付いていれば、姫君の身辺は何の心配もないはずなのである。ところが、「秋月」の場合は、「伏屋」の設定に入内をめぐる継母の奸計など、「住吉」の行動が絡められて行く。その結果、多くの矛盾を抱えることとなる。その不整合を克服する一環として、ここでの乳母たちの場合は、有名無実の存在を余儀なくされるのである。例えば、ここでの乳母たちは、北の方の妨害に対して、立ち向うことができない。入内の中止を聞いた際にも、

何事をきこしめして、御うちまいりはとくまり給ふらんと心くるしく思ひ給ひける

と、なすすべもないのである。

乳母が不在の場合、多くの継子物語では、それに替えて、『住吉』の侍従、『落窪』のあこぎのような、気の利いた侍女が姫君の立場を護るために活躍することとなる。それに対して、乳母の存在を形の上では容認する『秋月』では、そのような侍女を置くことはできない。そこで、これに代わるものとして、愛子の活躍

が要請されたのではなかったか。すなわち、ここでの愛子の行動は、「侍従」「あこぎ」に相当する役割が転嫁されることによって成ったのである。そこには、『伏屋』以来の、「二人の姫君、たがひにむつれ……」という、義姉妹の仲の良さ、『住吉』での姫君と侍従の、一面において姉妹のような関係が、重ね合わされたことも考えられよう。愛子がそのような役割を担わされて行く、その転換点は、「もしほ」「おはり」が、男君の求愛をめぐってなされた継母の奸計について、侍従ならぬ愛子に耳打ちした部分にあると考えるとよいであろう。

このようにしてなされた愛子の役割転換は、もう一面において、姫君という立場を活かしてこそ行なわれうる行動を、描く結果となった。中将や愛敬への直接の説得や、双方の侍女乳母たちを難なく動かして行く統率力、そしてその結実である、女装の男君が忍ぶ一夜の場面などである。『秋月』はこのように、先行のものをやや変えることによって、意外な面白さを引き出してみせる。それはまた、この表(三)に相当する部分でなされている、もう一方の増幅として特徴をなす、「近衛中将」をめぐる一連の記事とともに、あくまで『住吉』との響き合いの中で行なわれて行くのであった。

## 結

室町期の物語草子の多くは、先行文芸に何らかの手を加えることによって成っている。それに加え、個々の作品が特徴ある異本



群を抱えていることを考えるならば、まさに改作の文芸と言うべきものであろう。その中でも、それ自体室町の物語である『伏屋』を土台として、幾つもの同時代の物語を取り込んで行った『秋月』は、ある意味で最も室町物語的な側面を持ち合わせた作品ではなかったらうか。

今回対象とした恋愛譚の部分における『住吉』との再度の交渉は、従来行なわれえなかつた斬新な方法をもってなされて行った。具体的には、(一)『住吉』中の連続した敷場面を『伏屋』に繋ぎ合わせる、(二)『住吉』の人間関係や役割の一部を交換し、発展させる等の方法がとられた。その結果『伏屋』『住吉』の性格を兼ね備えるばかりでなく、筋の複雑さと面白さの上では、両者はるかに抜くことともなつたのである。このような『秋月』の創作は、『伏屋』『住吉』の二作品間の長期にわたる交錯の結果生じた連関と、その二作品が当代に多くの読者を持っていたことを、最大限に活用することによってなされたものであつた。

『住吉』を呼び、道行の部分に多くの故事説話を呼び込んで行つた『秋月』のエネルギーは、その後も力を発揮し続ける。「継子物」という点からこれを見て行くならば、姫君が九州へ下向するという設定に伴つて、山陰中納言や飛鳥井女君を背後に感じさせるモチーフが次々と繋げられて行く。大式からの求愛という記事にもその影響の見える、『源氏物語』の玉鬘巻の影響の色濃い一連の筋の運びは、愛子を「右近」に重ね合わせて京で愛敬の無事を観音に祈願することとし、その利生によつて愛敬と再会する

など、大団円への骨組みとされて行くのである。これらについては稿を改めて論ずることとした。

〔注〕

- ① 松本隆信氏「擬古物語系統の室町時代物語(統)——『伏屋』『岩屋』『一本菊』外——」(『斯道文庫論集』第五輯、昭四二・一七) および佐藤りつ氏「『秋月物語』考」「『秋月物語』統考」(『東洋大学短期大学紀要』第一号、昭四五・三および第二号、昭四六・二)
- ② 昭三。
- ③ 注①参照。このほか桑原博史氏は、『秋月』について、『住吉物語』とまったく同じ筋立てに、『伏屋』の亀の出現で危急の姫が救われるという趣向を加えた「ものである」とされている(『岩波日本古典文学大辞典』昭五八)。
- ④ 『室町時代物語大成 第八』(昭五五) 所収のものを使用した。
- ⑤ 現存諸本中書写年代の最も古い尊経閣文庫本は、今回問題としている男女主人公の恋愛の交渉に相当する部分に大きな欠損を生じているため、使用を控えた。
- ⑥ 『室町時代物語大成 第十一』(昭五八) 所収。
- ⑦ 『秋月物語』諸本については、松本隆信氏「擬古物語系統の室町時代物語(統)」(注①参照) および同氏「室町時代物語類現存本簡明目錄」(『御伽草子の世界』(昭五七) 所収) に、三つの系統が示されている。それらを要約するならば、刊本系統より写本系統の方が本文の成り立ちが古く、中でも高山歎喜寺蔵本は、寛永頃とされる書写年代も現存本中では最古とされる。
- ⑧ 『室町時代物語大成 第一』(昭四八) 所収。



⑨ これに続く部分においても、母の供養を怠らない点、義姉妹の仲が非常に良い点、姫君に対する父の待遇が格別である点など、『ふせや』の影響は色濃いものがある。

⑩ 『中世物語研究——住吉物語論考』（昭四二）七四～七五頁。ただし室町時代物語『さごろも』東京都立中央図書館加賀文庫蔵本には、主人公の女君の形容として次のような一節が見られる（古典文庫『室町時代物語 七』による）

されは、日にそへて、なてしこの、露おもけなる、ありさま、おみなへしの、かせになひく、御すかた、いと心くるしく、おほしめし、とく、むかへたてまつり、ひとつところに、すみきこえんと、おほされける。

⑪ ただし尊経閣文庫本には、母の臨中の際のことばとして、『なみく／＼ならんありさま、せさせ給はて、みかとに、たてまつり給へ』の一節が見られる。同本の欠損している部分には、これがどの程度関わっていたものであろうか。

⑫ 次に該当箇所を引用する。

古宮のおほせられし、御官仕の事いかにと、御めのと、わするゝときなく、おとろかし侍りければ、中納言、われもおこたる時なけれとも、北の方に聞えあらんに、我子ならねは、おなしこゝろに、いそかんも、かたければ、云も出さすとして、思ひわつらひ給けり

⑬ 例えば同時期に行なわれたものとしては、ややその過程に違いはあるが、『しのびね物語』の例が考えられる。

⑭ 例えば武田祐吉氏蔵『さごろも』に、次のような類例が見られる。されとも、ゆゝしき、人なれば、大しやう、たいしん、くきやう、

『伏屋の物語』から『秋月物語』へ

殿上人に、ゐたるまでも、我をとらしとそ、文を、参らせ給ひける（『古典文庫室町時代物語七』（昭四一））

⑮ 出会いの場としての清水観音はあまりにも有名であるが大秦も薬師および観音の寺として広い信仰を集めたという点においては、共通するものがある。大秦への変更の背景には、或いは『狭衣物語』の影響が考えられるだろうか。

⑯ 島津氏前掲書参照。

⑰ この大秦詣での条は、貴公子が隣合わせた姫君の局を垣間見る点等において、『しぐれ』の冒頭の清水詣での条とも符合する。ちなみに『しぐれ』の男君の参詣は、妹である新女御が病を得て参籠した、その見舞によるものである。

⑱ 二つの物語を繋ぎ合わせる例の一つとして、石川透氏によって論じられた、『落窪草子』後半に見られる『文正草子』の利用があげられる。（『落窪の草子』の成立』（『芸文研究』第四七号、昭六〇・一二））

⑲ 注①参照。

⑳ 『室町時代物語集第三』（昭一四）

㉑ 紫式部の娘で名乳母として知られた、『大式三位』のもじりか。この二人は「乳母」と明記され、他に侍女の名も見える。

㉒ 『住吉』『落窪』の姫君の不幸の大きな要因に、乳母に先立たれたことがあげられるのは、言うまでもないことであろう。

試みに、正妻の子として生れ、乳母が生存するという点で、この『秋月』と似た境遇である、『伏屋』『若屋』の例を考えてみよう。『伏屋』では乳母「こたかき」が、『若屋』でも乳母達がしっかり姫君を守っている。そこでは日常的な継母のいじめは、なされ得ない。男君との恋愛も、乳母や父の庇護の下で障害なく運ぶのである。従って継



母は、父や乳母の隙をついた上で、主として誘拐という手段をもって、危害を加えることとなる。

㉘ これらの他、鎌倉時代物語『小夜衣』にも、同じような役割を担った侍女が登場する。

㉙ 女装という趣向は、『平家物語』『曾我物語』等にも見られるものがあるが、ここでは直接的には、『伏屋』の清水詣での条に見られる、それをうけたものと思われる。

㉚ 「近衛中将」は、入内を断念した父が姫君のために見つけ出した嫁入先であるという点において、『住吉』での内大臣の子の宰相左兵衛の督(古活字本)に対応する。『秋月』(歎喜寺本)では、この近衛中将をめぐる以下の三つの記事が、嫁入りの準備から継母の奸計による誘拐に至る筋立に絡められて行く。(1)中将は愛敬に恋こがれていたが、入内するものと諦めて邸に籠っていた。そこへ最明寺の中将が来訪し、愛敬との縁談を告げる。(2)近衛家では愛敬を迎え入れるために、新御所を造立する。中将は嫁入りを指折り待つ。(3)愛敬の行方不明を聞いた中将は、悲嘆にくれる。

矢野本では以上の三点に加えて、(1)の前に、姫君の父大納言が最明寺殿と愛敬の嫁入先について相談する記事が見られる。愛敬を思い続ける人間の動向を、主人公中将と並行する形でこのように具体的に描いて行くことによって、愛敬の失踪はより悲劇的に、帰還はよりめでたさを増すこととなるのである。

(本学文学部非常勤講師)